

答え合わせ・解説

問1	答え 2 狩猟	狩猟は、弓矢の使用によって効率が飛躍的に上がりました。また、石鏃（せきぞく）と呼ばれる石製の矢じりを矢の先端につけることで、獲物を正確に仕留める技術が発達しました。獲物の皮は衣類になり、骨は道具になるなど、動物を余すところなく利用する知恵が縄文人にはありました。
問2	答え 1 土器	土器の登場により、植物の灰汁（あく）抜きや、穀物や貝類を煮て食べることが可能になりました。縄文土器の表面に見られる縄目の模様は、縄を押し付けてつけたもので、これが「縄文時代」の名称の由来となりました。
問3	答え 4 三内丸山遺跡	この遺跡からは、500棟以上の竪穴住居跡や、大型の掘立柱建物跡、大量の土器や石器などが出土しました。これにより、縄文人が長期間にわたり、計画的で安定した定住生活を送っていたことが証明されました。
問4	答え 2 大森貝塚	大森貝塚は、縄文時代の人々が長期間にわたって貝類を主食としていたことを示す場所です。ここで発見された土器の表面には、縄を転がしたような独特の模様が刻まれていました。モースはこの模様に注目し、このような特徴を持つ土器を使う時代を「縄文時代」と呼びました。
問5	答え 1 釣り針	釣り針は、シカの骨やイノシシの骨などを鋭く削って作られた漁具です。鈎とともに使用されることで、海や川の豊富な水産資源を効率的に得ることが可能になりました。
問6	答え 1 お雇い外国人	お雇い外国人は、大学の教授や鉄道の建設技師、軍の教官など、あらゆる分野で活躍しました。モースもその一人として来日し、科学教育や調査活動に携わりました。彼らは非常に高い給与で雇われましたが、その専門知識は日本人の若者に受け継がれ、後の日本近代化の土台となりました。
問7	答え 1 考古学	考古学は、発掘によって得られた土器、石器、建物跡などを客観的に調査・分析することで、当時の人々の食生活や住まい、社会の仕組みを復元する学問です。大森貝塚での調査が「科学的な手法」で行われたことは、単なる宝探しではない、学問としての考古学の幕開けを意味していました。
問8	答え 1 埴輪	埴輪は、古墳の周囲や頂上に並べられた素焼きの土製品です。人、馬、家、盾などの形があり、当時の服装や道具、社会の様子を知る貴重な歴史資料となっています。祭祀の場に置かれたり、墓域を守る結界としての役割があったと考えられています。
問9	答え 1 大森貝塚	大森貝塚は、現在の東京都品川区と大田区にまたがる場所に位置しています。モースはこの場所で発掘を行い、貝殻や土器などを丁寧に記録しました。これは日本で初めて、科学的な手法を用いて行われた発掘調査として歴史的に非常に重要な意味を持っています。
問10	答え 2 縄文時代	縄文時代は、竪穴住居に定住し、狩猟や採集、漁労を行って食料を得る生活が長く続いた時代です。土器の表面に縄目のような模様がつく「縄文土器」が使われたことからこの名がつけられました。
問11	答え 2 貝塚	貝塚は単なるゴミ捨て場ではなく、当時の人々の食生活や自然環境を知るための重要な考古資料です。貝殻に含まれるカルシウム分のおかげで、骨や角といった有機物が腐敗せずに残りやすいという特徴があります。
問12	答え 4 骨角器	骨角器には、魚を突くための鈎、釣り針、さらには衣類の製作に使用する針や刺突具などが含まれます。石よりも加工しやすく、鋭利で細かな形状を作れることが大きな強みでした。
問13	答え 3 貝塚	貝塚は、単なるゴミ捨て場ではなく、貝だけでなく魚の骨、動物の骨、石器、土器などがまとめて見つかります。これらを調べることで、縄文人がどのような環境で、どのような動物や植物を食べていたかを詳細に知ることができます。特に酸性の強い日本の土壌では骨などはすぐに消えてしまいがちですが、貝殻のカルシウム成分が土を中和することで、当時の遺物が奇跡的に残ることがあります。
問14	答え 2 石斧	石斧は、木の伐採や木材の加工に使用される「磨製石器」の代表格です。この道具のおかげで、人々は効率的に木を切り出し、竪穴住居の骨組みを作ったり、丸木舟を作ったりすることができました。
問15	答え 1 縄文土器	縄文土器は粘土を紐状にして積み上げ、野焼きによって作られた土器です。最大の特徴は、表面に縄を転がしたような模様があることで、この模様が名前の由来となっています。煮炊きに用いられたほか、貯蔵や運搬にも活用されました。
問16	答え 2 エドワード・モース	モースは動物学が専門でしたが、来日直後に乗車した列車の窓から大森貝塚の痕跡を見つけ、当時の日本政府の許可を得て発掘を行いました。彼は土器の紋様が縄のような形をしていることに注目し、そこからこの時代を「縄文時代」と呼びきっかけを作りました。